

## 茶と日本人

熊倉功夫

日本に最初にお茶が中国からもたらされたのは、八世紀から九世紀にかかる時代であったと思われる。当時、奈良朝から平安時代初期にあって、日本は中国から諸制度ならびに文物を輸入し、唐の文明に強い憧れをいだいていた。おそらく茶の導入も、中国文化憧憬の念から生まれたことではなかったかと思われる。

九世紀に入ると、日本人の中国への憧れは急速に変質した。すると流行していた喫茶風俗はほとんど消えかかる。その理由としては、最初に日本に入った茶は団茶といわれる特殊な茶で、日本人の嗜好に合わなかったことと、単なる中国風俗の模倣にすぎず、薬用効果などの意味づけがなされなかったことがあげられよう。

十二世紀末、中国から帰った僧栄西は、新しい中国の茶に関する情報をもたらした。従来は栄西が茶の種を日本に伝えたといわれてきたが、栄西の初期の史料には一切、茶種将来伝説は記されていない。また栄西自身も語っていない。栄西が持ち帰ったのは、宋代のことに江南でおこなわれていた緑茶の抹茶製造法とその飲みかたであった。茶種や茶樹は栄西が持ち帰らずとも、すでに日本で栽培されていたと考えやすい。

栄西が喫茶の歴史のなかで重要なのは、『喫茶養生記』を著してその薬用効果の宣伝につとめたことである。百薬の長は酒ではなく茶であった。茶の薬用効果を示す例話としては、『吾妻鑑』に、栄西が茶をもって源実朝の二日酔を直す話があり、また『沙石集』には牛飼と僧の問答のかたちで、茶の効果を述べている部分がある。

十三世紀末から十四世紀に入ると、葉としての茶ではなく、嗜好品としての茶の時代へと移った。体によいから飲むのではなく、おいしいから茶を飲む人が一般化し、そのなかからゲームとしての茶、いわゆる闘茶とよばれる遊びも展開する。

十五世紀なかばごろ、一人の茶人が登場する。村田珠光である。珠光は新しい茶の文化を提唱した。遊びとして趣向をこらした茶や中国から舶載される美術工芸を用いて儀礼化する茶と異なる、心の道としての茶である。これが今日の茶の湯（茶道）の源流であった。十六世紀に茶の湯は、日本を代表する文化として発達した。

織田信長や豊臣秀吉と千利休がつくりだした茶の湯世界について語る時間的余裕がないので、これは一切省略しよう。当時、庶民はどのような茶を飲んでいたのであるだろうか。現在、日本人がふだん飲んでいる煎茶はまだなかった。茶の湯で用いるのは、葉茶を臼でひいてつくる抹茶である。しかしこれは高価でたくさん飲んだら量はとれない。庶民は、上等な抹茶用の葉をつんだあと、晩（おそ）い時期に成長した葉でつくる晩茶を飲んだ。葉は硬いし大きいから、釜で炒るとか湯で煮てから日に干してつくる粗末な茶である。色は黒く、そのまま湯釜に投じて煮出して飲む。十六世紀の文献をみると、煎じ茶と記されている。まさに煎じ茶のように煮出して飲む茶である。

ところが十八世紀になると、煎じ茶が次第に質がよくなった。緑茶の緑を残したまま乾燥させる茶ができた。晩茶番茶を黒茶とよび、緑の茶は青茶とよんだ。今の緑茶である。緑茶は煮てはおいしくないで湯を通すための急須が使われるようになった。

日本の医学史に大きな影響を残したF・シーボルトが日本に到着した時代は、ちょうどこうした緑茶が大いに発展した時代であった。シーボルトの来日の目的は、日本からヨーロッパへ輸出するのに有望な貿易産品調査であった。そのなかの一つが日本の茶である。そのため、シーボルトは日本に到着すると、直に日本の茶樹をバタビアに送り、また茶のサンプルを集めている。今もなお、シーボルトの収集した二〇種以上の茶がライデンの民族学博物館にあり、そのな

かに「上喜撰」があるのには驚かされた。

幕末から明治維新にかけて、静岡の茶業が大きな発展をとげた。武士の牧の原台地入植からはじまって、日本最大の茶業地帯が形成される。近代化が成功するためには、先進国から機械製品等を購入する必要がある。そのための外貨獲得が可能か否かが、大きな岐れ道となる。日本の場合、この近代化の助走を支えたのが絹と茶であった。静岡をはじめとする日本の茶は、絹につぐ輸出額を誇っていたのである。

今日、日本の茶は健康という側面で再び注目されつつある。カテキンの機能が高く評価され、茶は万病に効果があるような宣伝もみられる。栄西の『喫茶養生記』をはじめ、茶が文明社会へ伝播していくときの役割は薬であった。最近では茶の効能研究に関する巨大プロジェクトも進行し、その秘密もときあかされるだろう。今や再び茶の機能の原点へたちもどろうとしている。その原点を大切にしつつ、日本の茶の歴史をふりかえる必要もあらうかと思われる。

(国立民族学博物館教授)